

# 近世の野々市

掘り出された江戸時代のくらし

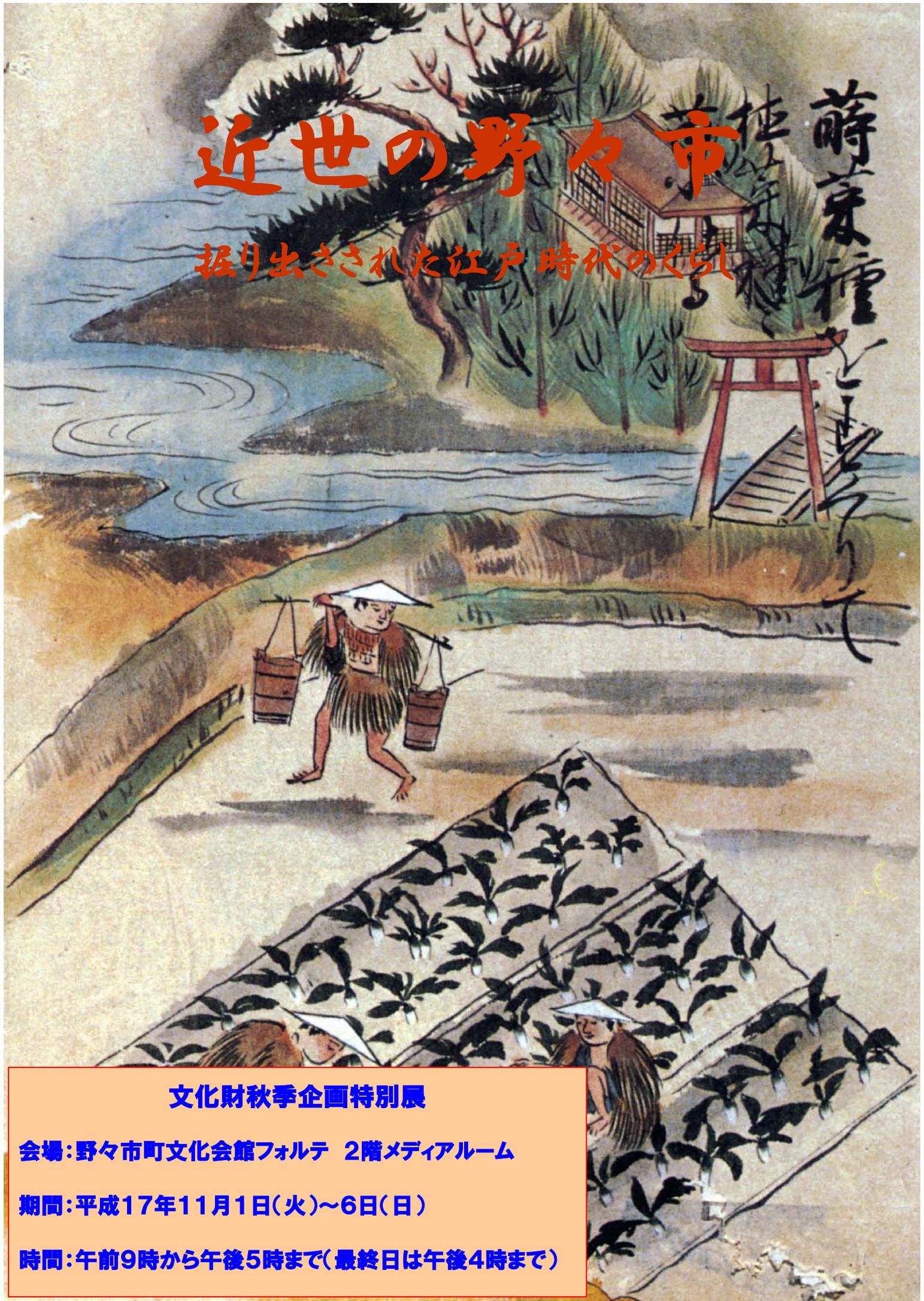
蒔原種

## 文化財秋季企画特別展

会場:野々市町文化会館フォルテ 2階メディアルーム

期間:平成17年11月1日(火)~6日(日)

時間:午前9時から午後5時まで(最終日は午後4時まで)

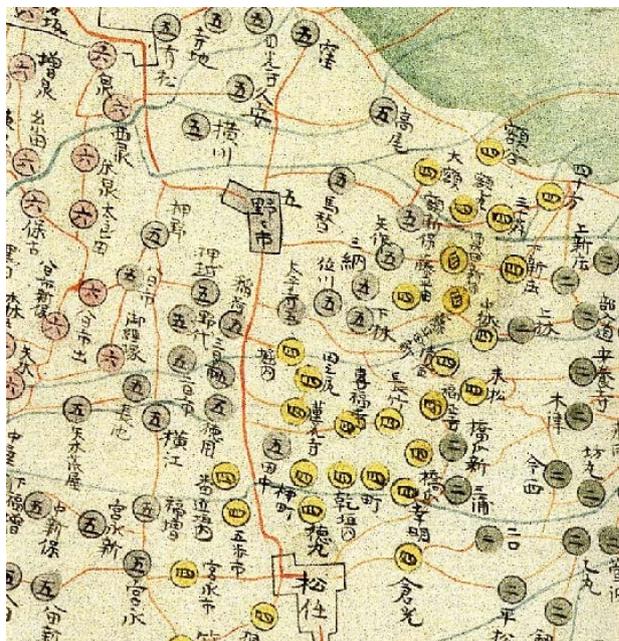


# 1 近世という時代

戦国末期の天正9年（1581）前田利家は、織田信長から能登1国を与えられはじめての国もち大名となりました。天正11年（1583）には、さらに加賀北（河北・石川）地域が加増され、居城を七尾小丸山から金沢に移した。翌天正12年は、越中国大名佐々成政と宝達志水町末森山城にて合戦を繰り広げて勝利を収め、その後、加賀・越中・能登の3カ国の大名に任じられました。利家は金沢城と城下町を整備し、そこを中心に藩体制を確立していきました。

前田氏領内である加賀・越中・能登の耕地の8割方は田んぼで、農産物は米がほとんどでした。米の大部分は領主の手を経て流通されており、日本海には年貢米を大坂へ運ぶ廻船が行き来し、大坂の堂島にあった米の取引所では、北陸産の米が全国の相場を左右するほどの生産高であったとされています。江戸時代中頃になると、農具や肥料の改良、労働の集約化などにより農業技術が発達し、その結果、平地の少ない場所や水利条件の悪い場所などに多い小規模な農業経営でも自立できてくるようになりました。

江戸時代後半の文化・文政期ころになると裕福な町人や地主は生活のゆとりを学問や遊芸文化に投じるようになります。江戸時代中頃の元禄期には、金沢城下町ですでに俳諧が盛んに行われており、さらに武家文化として繁栄していた儒学、詩文、茶道、能楽などを取り入れるようになります。これらは後に農村へと波及していき、村々の農民の中にも裕福な生活が生まれてきました。



石川郡村々組分図  
文政8年（1825）

## 2 近世の野々市

江戸時代の野々市町域の村々は、加賀藩<sup>かがはん</sup>に所属していました。現在の本町地域あたる野々市村は金沢城下から上方（大坂）へ向う北陸街道一番目の宿地<sup>やどち</sup>で、その他の村々は城下近郊の農村地帯として発達しました。村の周囲に形成されている田畑から作られる耕作物のほとんどは米でしたが、瓜<sup>うり</sup>や茄子<sup>なす</sup>などの季節野菜もつくっていたようです。また、金沢城下では多くの灯油を消費するため、その近隣地にあたる野々市周辺では菜種油<sup>なたねあぶら</sup>の栽培<sup>さいばい</sup>にも力をいれていたようです。菜種油は水車を用いて菜種<sup>ひ</sup>を挽き、粉にしたものを絞<sup>しぼ</sup>る方法がとられていました。

江戸時代の野々市は、田園が広がる中に菜の花畑があちらこちらで見られ、田んぼの合間<sup>ぬ</sup>を縫うように流れる用水の一角に水車小屋が建てられていた風景を想像することができます。



菜の花畑（イメージ）

現在残っている集落は江戸時代から成立したもので、加賀藩はこれらの村々をどのように支配していったのでしょうか。

藩主前田氏は、20 から 30 ほどの村を 1 区画にし、道場坊主や地侍出身の百姓が民政をつかさどる十村制度を制定し、領国経営を進めました。これは加賀藩独自の制度で、野々市全域を含む石川郡では元和元年（1615）に制度化され、一時期中断したことはあったものの藩政期を通じて存在しました。また、各村々には肝煎（きもいり）、組合頭（くみあいかしら）と呼ばれる村役人がいて、村内の様々な出来事を取り仕切っていました。

慶安元年（1649）3代藩主であった前田利常は、農政や知行制、都市・商業政策の改革を施した改作仕法を制定しました。これはいわゆる増税を目的とした法律で、各地に残る「村御印」はそれぞれの村に掛かる納税の請求書にあたります。



栗田遺跡 水車跡遺構

### 3 宿場町 野々市村

野々市村は現在の本町1丁目から4丁目の間の旧北陸街道沿いにあります。この村は、金沢城下から上方（大坂）へ向う最初の宿駅しゆくえきとして栄えるとともに城下近郊の農村でもありました。

村の中には荷物や人を運ぶために使用する馬が多く飼われていたようで、寛文6年（1666）には馬が87頭いたことが古文書こもんじょで記されており、領内では津幡・鶴来・宮腰みやのこしに次ぐ数でした。幕末には、農耕に必要な馬を増やす目的で牛馬市の開催が増加しました。嘉永7年（1854）には野々市村住吉社すみよししゃ（現ぬのいちじんしゃ布市神社）の社地内で大規模な牛馬市がとりおこなわれました。市での牛馬売買の取引は年々高まり、初めは年に1回だけであったものが慶応4年（1868）には毎月開催されるほどになりました。町内の神社には江戸時代に描かれた絵馬えまが多く残っており、当時の人々が馬に対して特別な思いをもっていたことが窺うかがえます。

馬の需要が高まっていくことで運輸業も発達していきました。村の中を流れる木呂川は白山方面との間を往来する水運に利用されており、村内を走る街道と木呂川との合流地点は材木の集積場しゅうせきじょうとなっていました。

このように、野々市の村の中は街道を中心に人々や物資を乗せた馬などがあふれかえるほど活気に満ちていたことが窺えます。



江戸至金沢図

巴御前図絵馬

弘化4年（1845）  
（太平寺白山神社蔵）



## 4 掘り出された農村(江戸時代前半)

<sup>あわた</sup>粟田遺跡は野々市町の南部に位置する遺跡です。この遺跡の南東部分から江戸時代前半（17～18世紀中頃）の集落遺跡が発見され、少しずつですが、この時期の人々の暮らしが分かってきました。

この遺跡からは石列を伴う整地層や、周囲に2～3段の石列を積んだ土坑、大小のピット、区画溝、素掘りの井戸などの遺構が検出されました。江戸時代の建物は地面に穴を掘って柱を埋め込む「掘立柱建物」から、平らな石を基礎としてその上に柱をたてる「礎石建物」へと変わっていく時期にあたります。

「礎石建物」の基礎となる石は地上に出ているため発掘調査の際には既に失われていることも多く全容は分かりませんが、いくつかの基礎となるような石が検出されたことから、粟田遺跡にも「礎石建物」が存在したものと思われます。

これらの遺構からは唐津焼の碗・皿・播鉢、伊万里焼の碗・皿・瓶、素焼きの土師器皿、越中瀬戸焼の皿、火鉢、石臼などが出土しています。特に唐津焼と伊万里焼の出土が目立ちますが、これは海運が発達して商品の流通が容易になったこと、これまで活発だった海外輸出が減少し、国内での販売を増やすため、技術改良や製造の簡略化によって大量生産を推進したことが大きな理由です。唐津焼と伊万里焼が出土遺物の中心を占めるのがこの時期の特徴です。

『石川県石川郡誌』には、「昔、粟田村はたびたび洪水があつて住民が安心できなかったので、粟田村は全部、新保村に移住した」、と記されていますが、今回発掘された粟田遺跡がかつての粟田村かもしれません。



粟田遺跡

## 5 掘り出された農村(江戸時代後半)

江戸時代に入ると、陶磁器の需用は大阪、江戸の大都市を中心に飛躍的に高まり、生活用具として次第に浸透していくことになります。農村部にこうした傾向が見られるのは江戸時代後半(18世紀以降)になってからになります。

江戸時代後半は、窯業の大生産地であった京都、肥前から工人あるいは技術が広く伝わり、各地にその影響を受けた地方窯が開かれていきます。

町内の御経塚に所在する御経塚遺跡デト地区では、江戸時代後半の村が確認されています。調査の結果、礎石をもつ建物1棟、井戸10基、敷地を区画する溝、水田の用水などが見つっています。井戸は深さ1~1.2mで水が湧いたと思われ、この地域の飲料水確保の容易さが窺われます。遺物では瀬戸・美濃(愛知・岐阜)、肥前(佐賀)、越前(福井)などの碗、皿、鉢、徳利、猪口などが出土しています。また行火や玩具、瓦などは地元で造ったものを使用していたようです。町内では江戸時代前半の集落跡(粟田遺跡)が確認されていますが、そこに比べて産地、器種のバリエーションも豊富になり、出土する遺物の量も多くなります。展示されているものを見ても分かるように現在みなさんが使っている食器類とほとんど変わらないと思いませんか？

参考文献 「図説江戸考古学研究事典」



## 6 田んぼと用水

江戸時代の農民は、永年の農作業の経験に基<sup>もと</sup>づき、肥料の与え方や農具の改良、作業手順の合理化など工夫を重ねていき、農業技術が発達しました。また、幕末には現在も町域を流れる富<sup>とがし</sup>樫<sup>しょうすい</sup>用水や郷<sup>ごう</sup>用水<sup>しょうすい</sup>などの灌<sup>かん</sup>漑<sup>がい</sup>用水を整備し、農業経営の規模が大きく改善していきました。

町内では、江戸時代の田んぼを発掘調査したことはありませんが、田んぼの脇を流れる用水は確認することができました。用水は、幅2m前後の大きさで、埋まっている土はほとんどが砂<sup>じゃり</sup>利であることから、水が盛んに流れていたことを示すものと考えられます。出土する遺物は、おそらく村で使わなくなったであろう陶磁器<sup>とうじき</sup>などの生活道具がほとんどです。この時代から川のポイ捨てがあったのでしょうか。

また、これら日常用品のほかに火葬<sup>かそう</sup>した後の人骨も見つかることがあります。場所によってはお供え用に使用したと考えられる土師<sup>はじ</sup>器<sup>き</sup>皿の破片が多く見つかるところもあり、近くで埋葬された後、必要のなくなった骨は用水に捨てていたかもしれません。



発掘された用水の跡  
(粟田遺跡)



ため池用水の図  
(農業図絵 享保2年(1717))

## コラム1 石はどこから運ばれたの？

古来より、人々は石を素材にしていろいろな道具を作ってきました。

現在は、石そのものを扱う道具は少なくなりましたが、江戸時代は硯すずりや臼うすなどの生活用具、井戸枠いどわくや土台石どだいしなどの建築部材、墓石とうろうや灯籠しんこういぶつなどの信仰遺物といったいろいろな製品や部材が使われていました。これら製品の素材である石材はどこから運ばれるのでしょうか。

金沢市から白山市、小松市までの山間部を歩くと、ぽっかりと開いた洞窟どうくつをみることができます。洞窟の穴の大きさはおよそ1mから5・6m、奥行きは2・3mから50m以上のものと様々で、山の斜面上に連続して掘られている場所もあります。これらの洞窟は、江戸時代から昭和30年代まで切り出されていた石切場いしきりばの跡になります。寛文年間かんぶん（17世紀半ば）には、金沢市鷹巣たかのす、清瀬きよせ、白山市鶴来小原つるきおはらで石切場があったと記述された文書が残っています。

町内には、江戸時代後半に作られた墓石や灯籠ちようずばちなどが残っており、これらは近隣で採掘された石材を使用しています。



金沢市 額谷石切場の跡



押野六地藏石堂  
天保2年（1831）

手水鉢（本町白山神社）  
文久2年（1862）

## コラム2 掘り出された鏡

今から9年前の平成8年秋に、野々市町の南西に広がる末松1丁目で、道路建設に先立つ遺跡の発掘調査が行なわれました。新しく発見されたこの遺跡は、昔から残る付近の土地の名前を取って「末松しりわん遺跡」と名づけられました。発掘された面積は、わずか45坪ほどと狭かったのですが、奈良・平安時代の人々が暮らしていた地面の上に、江戸時代終わりごろから明治時代初めにかけての地層がきれいに残っていました。硬く叩きしめられたこの地層は、当時の建物が建っていた地盤と考えられ、注意深く掘りくずしていくと、中から柄のついた手鏡や、タバコを吸う道具であるキセルの吸い口などが見つかりました。この鏡やキセルの吸い口はともに銅でできています。キセルの方は発見された時は緑色のサビがまわり中を覆っており、今にも壊れてしまうような状態でした。しかし、鏡の方は背面に強く折れ曲がってはいましたが、鏡面の方は少し汚れているものの今でも顔を映し出す部分が残っているほど保存状態の良いものでした。背面には植物の模様と「藤原重勝」という人物の名前が鑄出されています。きっとこの鏡を作った職人さんの名前ではないでしょうか。およそ150年前のこの手鏡は、いったいどんな「美人」を映し出していたのでしょうか？



末松しりわん遺跡  
発掘調査の様子



末松しりわん遺跡出土  
手鏡（藤原重勝銘）